

## 業界短信

(20年4月1日～5月31日)

### キヨシゲ、新鋼材加工設備が稼働 (鉄鋼新聞、4/2)

㈱キヨシゲ(千葉県浦安市、小林光徳社長)は、段階的に進めてきた加工設備の更新、増設が完了。鋼板類の自動化、効率化、品質安定を実現するとともに納期対応力を高めた。昨年12月から3月にかけて、ユニットワーカー2基、薄板用パレットパンチプレスとシャーリング機各1基を導入、順次操業を開始している。

### 玉造㈱、厚板加工を効率化 (鉄鋼新聞、4/2)

玉造㈱(札幌市、西村孝治社長)は、恵庭工場・レーザ無人化工場で6KWレーザ溶断機2基を4KW2基へ更新する。これによって同工場は昨年更新分と併せて4KW溶断機4基体制とする方針。稼働は6月と9月の予定。溶断可能な板厚は1.6～22ミリで、ピアシングに要する時間は従来の2分の1。

### 太陽シャーリング、母材の大型化に対応 (鉄鋼新聞 4/4)

太陽シャーリング㈱(広島市中区、浅利重法社長)は、3月26日、母材大型化への対応として、水切りクレーンを40トンタイプへ更新した。同社は、6期連続の増収増益を記録。ユーザーである造船、産機の好調が続き、切板生産量は月間4千トン台が常態化している。今回更新した水切りクレーンは吊具下荷重15トンタイプから25トンが吊れる40トンタイプとした。クレーン本体と大型化に伴う柱の補強など建屋補修費用を含め、総投資額は2億5千万円

### 関根床用鋼板、規格縞板、在庫体制を整備（鉄鋼新聞、4／4）

関根床用鋼板㈱（千葉県浦安市、関根保彦社長）は、主力アイテムの縞鋼板について、ミルシート付き（S S 400）の在庫体制を整えた。漸増する規格縞板ニーズに対し、小ロスポットものに対応するため。定尺品（板厚、サイズ別に9種）を中心に、切板（3種）の注文も受ける。定尺品は板厚3.2ミリ、4.5ミリ、6ミリそれぞれに対し、3×6、4×8、5×10の9種。切板は当面は板厚3.2ミリ、4.5ミリ、6ミリの3種だが、将来的には厚物領域を拡大する意向。ミルシート付き規格縞板はこれまでは特定ユーザーの物件対応に限定されていた。昨年に発生したいわゆるエレベータ問題や改正建築基準法を機に広く一般の取引先からもニーズが漸増。

### 神鋼鋼板加工、アクアガスで効率溶断（鉄鋼新聞、4／9）

神鋼鋼板加工㈱（千葉県市川市、八十川雅明社長）は、ガス溶断の生産性向上を目的に、アクアガス（酸水素ガス）によるガス溶断を4月から開始した。従来のLPGに比べて、①切断スピードが約30%アップ、②熱歪みや反り抑制による品質向上と後処理作業負担の軽減、③歩留まり向上、④トータルコスト削減に加え、地球環境及び作業環境改善への貢献に寄与。生産性の低下を避けるため、切断機のNC化を推し進める中で、レーザやプラズマを順次設置してきた。

### 熱金鋼業、プラズマ更新、全5基60KW（産業新聞、4／9）

熱金鋼業㈱（愛知県弥富市、山村熹社長）は、6月中をメドに、本社弥富工場の30KWプラズマ1基を更新し、全5基のプラズマを60KWとする。説田速度工場にあこう効率を10-15%変え、納期対応力をさらに強化することが目的。5月には作業環境の改善を目指してヒュームの固化装置を既存のプラズマ3期に取り付け、全プラズマへの対応を図る。一連の投資額は7千万円

強。同社はガセットやベースなど建築鉄骨用プレートの切断を中心に、月刊2000トン程度の加工を行う。

#### **井上鋼材、横浜・関内に新営業所（鉄鋼新聞、4／15）**

井上鋼材(株)（横浜市鶴見区、井上孝一社長）は、土木建材事業を拡充するため、4月17日に横浜・関内に新たな営業所を開設する。当初は6人体制でスタートする。

#### **玉造(株)、集塵機を増設（産業新聞、5／14）**

玉造(株)（札幌市、西村孝治社長）は、このほど、恵庭工場LFSに集塵機とダストプレスを新・増設した。プラズマから発生するヒュームのダスト減容・固化で、職場環境の改善促進や処理作業の大幅な簡素化を実現させた。道内シャワーのダストプレスの導入は初めて。

#### **日鉄神鋼シャーリング、今期切板月間3300トン目標（産業新聞、5／14）**

(株)日鉄神鋼シャーリング（大阪市此花区、木村秀明社長）は、08年度の切板数量を月間平均3300トンとし、内訳は橋梁同1800トン、鉄骨向け同1000トン、その他同500トンを予定している。工場建屋を増築し、クレーン1基を更新する計画。

#### **小谷鋼業、今期プラズマを更新（産業新聞、5／20）**

小谷鋼業(株)（大阪市西淀川区、小谷浩史社長）は、今期取扱量は年間1万8千トンとし、採算を重視した切板受注を展開する。設備は老朽化対策のため、プラズマ1基を更新する計画。時期は7月、稼働は8月を予定。これにより切る板能力としては、月間1500ー1800トン体制となる。

**東海鋼材工業、二次加工機能強化を加速（産業新聞、5 / 29）**

東海鋼材工業㈱（愛知県海部郡、後藤實社長）は、このほど、マシニングセンター、ラジアルボール盤、溶接ロボット各1基を更新した。近年、取り組みを進めている2次加工分野の機能強化の一環で、設備投資額は約5千万円。同社の鋼板加工事業部はレーザ3基、プラズマ2基などの設備を擁し、加工量は月間平均で橋梁向け約1000トン、産業機械向け約3000トン。最近では産業機械向けの需要増に対応するため、加工機能強化を進めている。